



左=万暦12(1584)年 右=順治15(1658)年  
金武間切恩納ノロの辞令書 (島袋源一郎著『伝説補遺 沖縄歴史』1952年発刊の巻頭グラビアより)

### 【恩納ノロの辞令書】

表2を見ると、2と12に恩納ノロの辞令書を  
確認することができます。両辞令書の発給年  
月日に注目すると、恩納間切が創設される  
89年前と15年前のもので、当時の恩納ノロは  
金武間切恩納村で生活していたことが分か  
ります。また、琉球辞令書は形式上、①古  
琉球辞令書 ②過渡期辞令書 ③近世辞令  
書に区分されますが、2が①、12が②であ  
ることも分かります。

両辞令書は首里王府がノロを任命するた  
めに発給したのですが、ノロであった母か  
ら娘(原文では「もとののろのくわ」(元のノ  
ロの子)にノロ職が継承されていることも記  
されています。高良倉吉はノロ辞令書の特徴  
として、「母親が受けた辞令書は母の死去と  
ともに効力を失うものであり、娘に対しては  
全く別のあらたな効力を有する辞令書が必

要だった」と解説しています。

現時点において、両辞令書の原本は確認されていませんが、1952年  
発刊の島袋源一郎著『伝説補遺 沖縄歴史』だけにそれらの写真が掲載さ  
れています(写真参照)。戦後発刊された本に写真が掲載されているとい  
うことは、恩納ノロの辞令書は戦禍を免れたのか、それとも戦前撮影した  
写真を使用したのか、写真の原本はどこにあるのか、などいろいろな疑問  
が生じます。

### 【博物館への展示】

1936(昭和11)年7月4日、首里城北殿に「郷土博物館」が開館しま  
した。郷土博物館にどのような資料が所蔵・展示されていたのかは、2冊  
の資料目録(1936年版・1939年版)と、一冊の葉(内容から

1938年版か1941年版から確認することができます。資料目録  
には「琉球藩辞令 旧藩時代の辞令書各種」と記され、それ以上の情報は  
ありません。葉には、恩納ノロの辞令書に関する翻刻文が2点掲載され、  
万暦12(1584)年の辞令書の特徴として①書に精通した人が大胆に  
書き流している ②漢字を使用せず仮名を使用している ③国王から一人  
の神職に対して姓を使わず名前のみを記している、と解説されています。  
また、順治15(1658)年の辞令書については、一世紀を下ると次第に漢字が  
多くなる、と指摘されています。

郷土博物館は、太平洋戦争の影響で1943(昭和18)年に閉館、個人  
所有の収蔵品は返却し、館所蔵のものは分散退避させましたが、多くの  
資料は沖縄戦で焼失したといわれています。

恩納ノロの辞令書がどのような経緯で展示されたのか、博物館所有の  
資料だったのか、個人所有の借用資料だったのか、原本は戦時中どうなっ  
たのか、今回の資料調査では確認がとれませんでした。

恩納ノロの辞令書について調べると、今まで知らなかった資料との出会  
いが多くあり、歴史的な事実が明らかになると同時に課題も多く見つか  
りました。今後、さらなる資料調査を行い、課題を一つずつ解決しながら  
恩納村の歴史を記録していきたいと思えます。

(注)1666年、越来間切恩納村は、美里間切創設に伴い同間切に属した。1673年に  
恩納間切が創設されると、同間切恩納村と区別するために東恩納と改称された。

### 【参考文献】

- ・「沖縄県教育会附設郷土博物館が雑誌や展示を通して県内外に発信したメッセージに  
ついて」『沖縄国際大学 経済論集 第2巻第2号』2006年 源河葉子 沖縄国際大学経済学部
- ・「近代の首里城」『甦る首里城 歴史と復元』1993年 真栄平房敬 首里城復元期成会
- ・「古琉球の終焉とノロ辞令書」『神道大系 月報24』1982年 高良倉吉 神道体系編集会
- ・「辞令書と琉球王国」『琉球王国の構造』1987年 高良倉吉 吉川弘文館
- ・「ノロ」2017年 北中城村教育委員会
- ・「ノロとユタ」『沖縄近世史の諸相』1992年 田名真之 ひろぎ社
- ・「琉球宗教史の研究」1965年 鳥越憲三郎 角川書店